

第6章

2013年セネガル障害者予備調査報告 —「アフリカ障害者の十年」地域事務局と教育、運動の概要—

亀井 伸孝

要約：

「アフリカの障害者」の共同研究の一環として、セネガル共和国における予備調査を行った。障害者の生活と運動、「アフリカ障害者の十年」地域事務局の活動、ろう者コミュニティと手話の各分野について、おもにインタビューや参与観察を通じた概況調査を行った。セネガルが国際的な障害者当事者運動の拠点のひとつとなっている状況を明らかにするとともに、障害をもつ同国の住民の生活・労働調査に関する展望を示す。

キーワード：

セネガル、障害、ダカール、アフリカ障害者の十年、西アフリカ障害者団体連盟

はじめに：調査の目的と方法

本論は、日本貿易振興機構アジア経済研究所「アフリカの障害者：障害と開発の視点から」の一環として行われた、セネガル共和国における障害者予備調査の報告である。

2000年、アフリカ統一機構（Organisation of African Unity (OAU)）（現アフリカ連合（African Union (AU)））により「アフリカ障害者の十年」（2000-2009年）の取り組みが始められた。さらに、第一次「10年」の終了後も、アフリカ連合によって「第2次アフリカ障害者の十年」（2010-2019年）が設定された。これらの取り組みをサポートする形で、国際協力機構（JICA）はアフリカ各国の障害当事者団体からリーダーを日本およびタイなどのアジア・太平洋地域に招き、障害者の地位向上を目指した研修を行ってきている。

セネガルには、アフリカ障害者の十年の西・中部・北アフリカ地域事務局が設置されている。また、NGO 西アフリカ障害者団体連盟の本部も同国の首都ダカールに置かれている。同国から JICA の障害者リーダー研修に参加した人も複数いる。

このように、国際的な動向に深い関わりをもつ国でありながら、現地の障害者についての実態調査は乏しく、ろう者の手話言語に関する網羅的な研究も存在していない。

本研究は、以下の三点を目的として行われている。

- 1) アフリカにおける障害者の生活と運動の調査
- 2) アフリカ障害者の十年地域事務局の活動調査

3) セネガルにおけるろう者コミュニティと手話の調査

今回は予備調査として、これらの研究に資すると思われる基礎情報の収集と報告を中心としている。

予備調査期間は、2013年8月13～31日（19日間）、調査地は、首都ダカールおよび近郊都市（ピキン、チャロイ）、リンゲール、トゥーバである（図1、図2）。

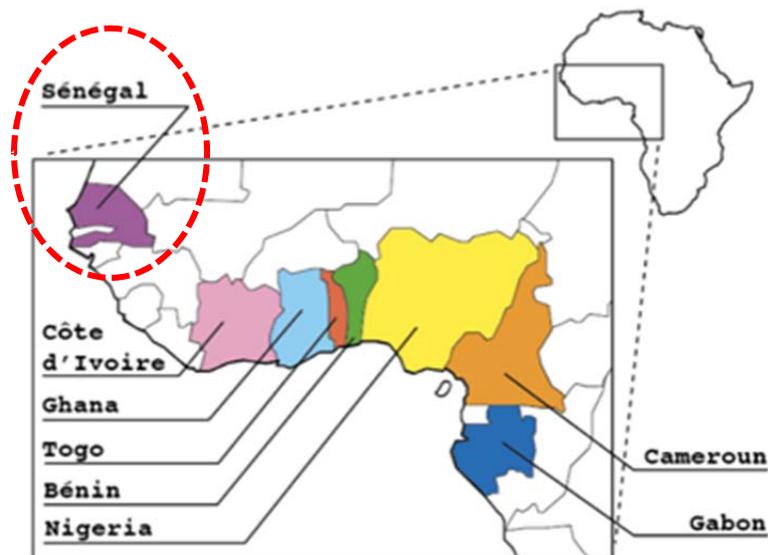


図1 セネガル共和国の位置（筆者作成）

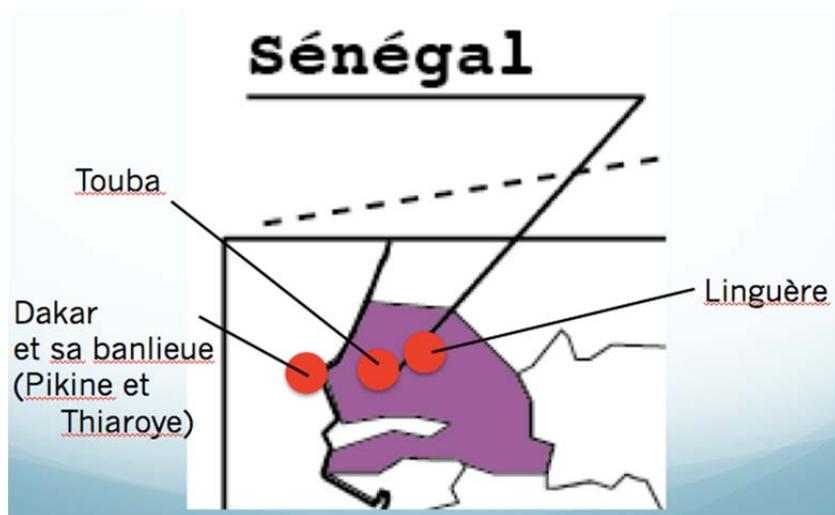


図2 調査地（筆者作成）

調査の方法は、資料収集のほか、インタビューや文化人類学的な参与観察を重視して行われた。

使用言語は、フランス語、フランス語圏アフリカ手話 (LSAF) と、片言のアラビア語、ウォロフ語である。

2014年に予定している本調査を前に、基本情報の整理を行い、とくに「マイノリティによる資源の活用と共有」という視点での研究の展望を示したい。

第1節 セネガル：国際的な障害者当事者運動の拠点

1. アフリカ障害者の十年：西アフリカにおける取り組み

セネガルの首都ダカールには、「アフリカ障害者の十年西・中部・北アフリカ地域事務局 (le Bureau Régional du Secrétariat pour l'Afrique de l'ouest, du centre et du nord, la Deuxième Décennie africaine pour les personnes handicapées)」が置かれている。この「10年」の取り組みの本部は南アフリカ共和国のプレトリアに置かれているが、東アフリカ・エチオピアのアディスアベバと西アフリカ・セネガルに、それぞれ地域事務局が置かれている。2004年のプレトリア本部開設の3年後、セネガルの地域事務局は2007年に開設された。翌2008年に、アディスアベバの事務局開設へと続く。

事務所は、ダカール市内リベルテ・スイス (Liberté 6) 地区に位置している。所長は下肢障害をもつ女性アイダ・サール (Aïda Sarr) で、JICAの研修事業への参加の機会に来日した経験をもつ人物である。所長を含めて事務所員は4人で、その他にボランティアスタッフが支援に関わっている。

この事務局は、北、西、中部アフリカを担当エリアとしている。AUからの直接の資金提供はなく、現在はスウェーデン国際開発協力庁 (Swedish International Development Cooperation Agency (Sida)) の資金援助によって運営されている。おもな業務は、管轄する地域の諸国の政府や障害者団体との連絡、交渉、啓発活動の実施などである。障害をもつ人びとに対して直接的な支援を行う機関ではない。その活動の範囲は、広い範囲に及ぶ (表1)。

表1 アフリカ障害者の十年西・中部・北アフリカ地域事務局がこれまでに政府などと関わりをもった国ぐに (インタビューに基づき筆者作成)

[West Africa] (11) Senegal; Gambia (En); Liberia (En); Côte d'Ivoire; Ghana (En); Togo; Nigeria (En); Mali; Mauritania (Ar); Burkina Faso; Cape Verde (Po)
[Central Africa] (3) Cameroon; Equatorial Guinea (Sp); Gabon
[North Africa] (2) Tunisia (Ar); Egypt (Ar)

主要な公用語: (En) 英語 (Ar) アラビア語 (Sp) スペイン語 (Po) ポルトガル語

(無印) フランス語

小規模の事務局でありながら、広域的かつ数多くの国ぐにを担当していること、フランス語圏西アフリカが多くを占めるものの、英語圏やアラビア語圏の国ぐにも少なくないことが分かる。

また、年限付の外部資金を獲得し、いくつかのパイロットプロジェクトを進めている。たとえば、ドイツ国際協力公社（Deutsche Gesellschaft für Internationale Zusammenarbeit (GIZ)）の期限付きの資金援助により、セネガル、ルワンダなどで試行的な障害者貧困削減プロジェクトなどを行ったり、欧州連合（EU）の支援を受けたイタリアの NGO、COL'OR とともに、障害をもつ人たちによるメディアの活用を推進する研修事業などを行ったりしている（この事業はケニアですすでに行われていたが(Docusound Kenya, on line)、セネガルのダカールでも 2013 年に開始された）。

課題として、諸国の政府における障害者政策および「アフリカ障害者の十年」の取り組みに対する姿勢に温度差が大きいことが挙げられた。すなわち、障害者の地位向上という目的のための啓発に諸国を訪れるものの、政府担当者の意欲や対応に大きなばらつきが存在していると述べる。

また、通常業務におけるスタッフや事務局運転資金が不足していること、多くの公用語を抱える地域であるために翻訳や連絡などに過大な負担がかかっていることなどが挙げられた。また、AU のイニシアチブで行われているため、現在は、AU を離脱しているモロッコとのコンタクトはない。

2. 西アフリカ障害者団体連盟

西アフリカには、国際 NGO として、西アフリカ障害者団体連盟（Fédération Ouest-Africaine des Association de Personnes Handicapées (FOAPH)）が結成されており、セネガルにその本部が置かれている。役員によれば、西アフリカのすべての国ぐにの障害者団体を網羅しており、国際 NGO の障害者インターナショナル（Disabled People's International (DPI)）の地域事務局（Regional Office）を兼ねている(Disabled People's International, on line)。

もともと、連盟の本部はマリ共和国の首都バマコにあったが、マリの治安悪化などに伴い、最近ダカールに移転した。セネガル全国肢体障害者協会（Association Nationale des Handicapés Moteurs du Sénégal (A.N.H.M.S)）の会長であるセネガル人肢体障害男性 Yatma Fall は、この西アフリカ連盟の役員も兼任している。

会長人事をめぐる混乱が生じた時期もあり、今回の調査では十分にこの連盟の活動の実態を明らかにすることはできなかったが、「アフリカ障害者の十年」地域事務局の設置も合わせて、セネガルが国際的な障害者当事者運動の拠点としての機能をもっている側面が垣間見える。

第2節 セネガル共和国の障害者人口、政策

1. 統計による障害者人口

以下では、セネガルの国内の状況に目を向けていきたい。

セネガルでは、国勢調査（Recensement Général de la Population et de l'Habitat）が、これまでに3回行われている。第1回が1976年、第2回が1988年、第3回が2002年である。第4回が2014年に計画されているとの情報があった（2013年8月時点）。

このうち、1988年と2002年の調査で、障害者の人口調査が行われた。

第2回の1988年の調査時点での障害者人口は134,792人であったとの結果がある（表2）。これは、同調査におけるセネガルの総人口6,773,417人のうちの1.99%に当たる。なお、これはセネガル国籍をもつ人のみに関する集計である。123,391人のセネガル国籍をもたない在住者は含まれていない。

表2 1998年に行われた国勢調査における障害者数（Direction de la Prévision et de la Statistique (1993) に基づき筆者作成）

	非障害者	肢体障害	視覚障害	ハンセン病	精神障害	その他	障害者計	総計
男性	3,214,699	17,246	10,767	4,225	6,501	29,962	68,701	3,283,400
女性	3,423,926	14,844	11,609	3,383	5,566	30,689	66,091	3,490,017
計	6,638,625	32,090	22,376	7,608	12,067	60,651	134,792	6,773,417

この時点での調査の特徴としては、障害のカテゴリーがやや大雑把で、とくに「その他 (Autres)」に分類されているケースが多いことが挙げられる。

次に、第3回の2002年の調査について見る。この時点での障害者人口は138,798人であるとの結果がある（表3）。これは、同調査におけるセネガルの総人口9,855,338人のうちの1.41%に当たる。

表3 2002年に行われた国勢調査における障害者数（Agence Nationale de la Statistique et de la Démographie (ANSD) (2002) に基づき筆者作成）

	視覚障害	聴覚障害	言語障害	下肢障害	上肢障害	知的障害	アルビノ
男性	9,643	7,792	6,912	20,249	11,040	9,915	579
女性	9,309	7,160	5,612	16,427	8,825	7,374	517
計	18,952	14,952	12,524	36,676	19,865	17,289	1,096

	ハンセン病	その他	障害者計	非障害者	総計
男性	1,111	15,371	74,749	4,771,377	4,846,126
女性	780	15,343	64,049	4,945,163	5,009,212
計	1,891	30,714	138,798	9,716,540	9,855,338

各障害種別人数の合計が障害者数総計を上回るのは、重複障害をもつ人

たちについて、複数のカテゴリーでカウントしていることによるものと推定される。

前回よりも、ややきめ細かなカテゴリーとともに調査がなされている。14年前の調査と比較して、総人口は46%増加しているが、障害者人口は3%しか増加しておらず、ほぼ横ばいの状態である。セネガルの人口構成や保健状況が激変しているとの観察はないため、おそらくは調査の精度の問題ではないかと考えられる。

障害者福祉を専門とする研究者は、これらの障害者数は過小評価であり、実際は一桁上回るほどの人口があるものと推定している（ENTSS（後述）におけるインタビュー）。

また、2002年の調査では、障害をもつ人の居住地域を、都市と地方とに分類して示している（表4）。

表4 2002年に行われた国勢調査における障害者の居住地域（Agence Nationale de la Statistique et de la Démographie (ANSD) (2002) に基づき筆者作成）

	障害者	非障害者	総計
都市	51,410 (37%)	3,956,180 (41%)	4,007,590 (41%)
地方	87,388 (63%)	5,760,360 (59%)	5,847,748 (59%)
計	138,798 (100%)	9,716,540 (100%)	9,855,338 (100%)

（ ）内は、そのカテゴリーにおける都市／地方の人口比を示す。

障害をもつ人の出現率が都市と地方とで同じであると仮定するならば、比較的、都市ではなく地方に留まっている傾向が読み取れるであろう。

このほか、2002年の調査では、都市よりも地方の男性障害者のほうが職をもっている割合が高いこと、女性障害者の最も多い職種は主婦であること、都市部で働く男性障害者の最も多い就労形態は自営業であることなどの指摘がある。より、社会経済的な側面に関心を払った調査が行われている様子を見る。

2. 憲法上の規定と政策

セネガル共和国憲法（la Constitution du Sénégal (adoptée au référendum du 07 janvier 2001)）には、結婚と家族に関する第17条において、障害者に関する項目が含まれている。

Mariage et famille

Article 17 : (...) L'Etat et les collectivités publiques ont le devoir social de veiller à la santé physique et morale de la famille, et en particulier des personnes handicapées et des personnes âgées. (...)

結婚と家族

第17条 (….) 国および公共団体は、家族と、とりわけ障害者、高齢者の心身の健康に留意する社会的義務をもつ。(….) (引用者訳)

セネガルにおける障害者政策の状況について述べる (ENTSS (後述) および FSAPH (後述) におけるインタビュー)。政府においては、保健社会福祉省・社会福祉局 (Direction Générale de l'Action Sociale, Ministère de la santé et de l'Action Sociale) が、障害者政策を担当している。

調査の時点で、障害者年金や、障害者枠公務員採用制度はない (コートジボワールにおける事例は亀井(2010)参照)。また、物品支給 (杖など) が行われる時があるが、必ずしも常時行われているわけではない。

障害者団体に対して活動の補助金があり、毎年 1,500,000FCFA から 2,000,000FCFA 程度が支給される (1 ユーロ=655.957FCFA、1 円=約 5FCFA (2013年8月時点の相場))。これらは、水光熱費や交通・通信費、事務所運営費などに用いられる。

また、障害者によって構成される経済的利益集団 (groupement d'intérêt économique (GIE)) に対し、審査を経た上で、プロジェクトへの補助金が出ることがある (ただし1回限り)。

政府による政策としては、ダカールに国立福祉専門職養成学校 (Ecole Nationale des Travailleurs Sociaux Spécialisés (ENTSS)) が設置されている。学校は、ダカール市内のポワン・ウー (Point E) 地区に位置している。

ここは、セネガルにおける障害者福祉の教育研究の中心となっている。この学校には、ろう者の講師が手話を、視覚障害の講師が点字を指導する授業がある。さらにセネガル国内だけでなく、コートジボワールの同じ社会福祉分野の専門職養成学校である国立社会福祉研修所 (Institut National de Formation Sociale (INFS)) と協定を結び、留学生を受け入れるなど、国境を越えた活動も盛んである。

この他、次節で述べる特別支援教育が政府によって行われている。

第3節 セネガル共和国の教育と運動

1. セネガルにおける特別支援教育

セネガルにおける障害児のための特別支援学校は、明らかにになった範囲で合計7校存在している。また、未調査であるが、さらに学校が2校存在するとの情報がある (表5)。

表5 セネガル共和国の障害児特別支援学校の一覧 (インタビューに基づき筆者作成)

<p>ろう学校 (4校)</p> <p>(1) Ecole Etoile Brillante du Matin pour les Sourds du Sénégal (私立) (セネガル明けの明星ろう学校) ダカール市内アン・マリスト (Hann Mariste) 地区に位置する 1977年、アメリカ人ろう者牧師 Andrew J. Foster によって設立</p> <p>(2) Centre Verbo-Tonal de Dakar (国立) (ダカール口話センター) ダカール市内ラ・メディナ (La Medina) 地区に位置する</p> <p>(3) Centre d' Education Spécialisée des Enfants Sourds (CESES) (私立) (ろう児特別支援教育センター) ダカールの近郊都市ゲジャワイ (Guédiawaye) に位置する 2001年、セネガル人男性ろう者教員 Pape Oumar Faye によって設立</p> <p>(4) Ecole SOS Enfants Sourds (私立) (SOS ろう学校) ダカールの近郊都市ティエス (Thiès) に位置する セネガル人男性ろう者教員 Ibrahima Faye Samb によって設立</p>
<p>盲学校 (2校?)</p> <p>(1) Institut National d'Education et de Formation des Jeunes Aveugles (INEFJA) (国立) (国立盲学校) ダカールの近郊都市ティエス (Thiès) に位置する</p> <p>(2) 盲学校 (私立) 1校 【伝聞につき詳細不明】 ダカール近郊に位置する</p>
<p>肢体障害支援学校 (1校)</p> <p>(1) Centre Talibou Dabo (国立) (タリブ・ダボ・センター) ダカール市内グラン・ヨフ (Grand-Yoff) 地区に位置する</p>
<p>知的障害支援学校 (2校?)</p> <p>(1) Centre de Pédopsychiatrie Keur Khaleyi (国立) (クール・カレイ (子どもたちの家) 児童精神医学センター)</p>

ファン (Fann) 地区に位置する

(2) 知的障害支援学校 (私立) 1校【伝聞につき詳細不明】

ダカール近郊に位置する

障害の種別に見ると、ろう学校が最も多く4校を数える。聴覚、視覚、肢体、知的の各種別に、国立の学校が1校ずつある。

Ecole Etoile Brillante du Matin pour les Sourds du Sénégal (セネガル明けの明星ろう学校) は、アフリカ系アメリカ人のろう者宣教師アンドリュー・フォスターによって設置されたキリスト教系の学校である(Christian Mission for the Deaf, on line)。これは、同国で最初に設立されたろう学校であった。当初、西・中部アフリカ一帯に設置された系列の学校と同様に、Ecole Ephphatha pour les Sourds (エッフアタろう学校) と名付けられていたが、やがてEcole Renaissance des Sourds de Dakar (ダカールルネッサンスろう学校) に改名、現在は3つ目の学校名となっている。

同校は、キリスト教徒の割合が多数を占めるギニア湾沿岸の諸都市(アビジャン、アクラ、コトヌー、イバダンなど)で学校事業を展開していたフォスターが、唯一、イスラーム教徒の多い地域に開設したろう学校であった。

Centre Verbo-Tonal de Dakar (ダカール口話センター) は、唯一の国立ろう学校である。フランス語の口話法を取り入れた教育を行っている。

Centre d'Education Spécialisée des Enfants Sourds (CESES) (ろう児特別支援教育センター) と、Ecole SOS Enfants Sourds (SOS ろう学校) は、いずれもろう者教員によって設立されたろう学校である。フォスターによって設立された学校で教員の経験を積んだ教員が、独立する形で学校を設立したものであり、手話による教育を行っている。

ろう学校4校の分布を地図に示した(図3)。首都ダカール近郊における一極集中の状況が浮かび上がる。内陸部の障害をもつ子どもたちの実態調査は急務である。

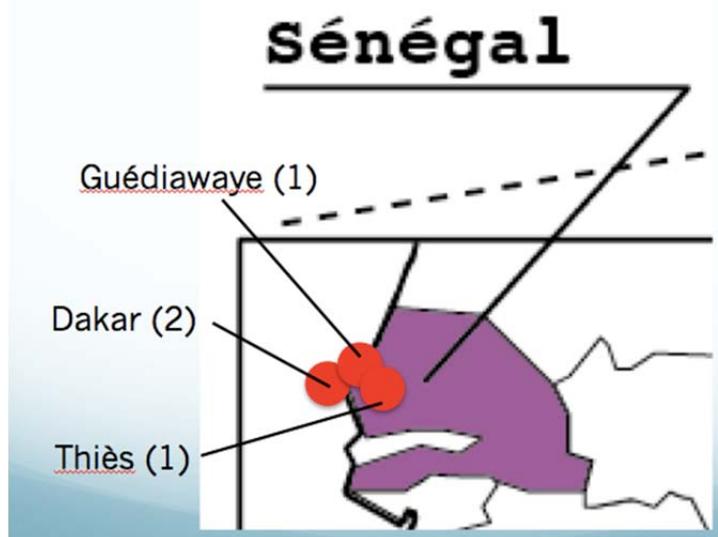


図3 セネガルにおけるろう学校の分布 (筆者作成)

2. セネガルの障害者団体

セネガルで最も大きな当事者団体として、la Fédération Sénégalaise des Association de Personnes Handicapées (FSAPH) (セネガル障害者団体連盟) がある。全国 27 の障害者団体を束ねる連盟である。事務所はダカール市内の Castor cité des Eaux 地区に位置している。加盟団体の一覧を表に示す(表 6)。

表 6 セネガル障害者団体連盟 (FSAPH) 加盟 27 団体の一覧 (FSAPH 資料に基づき筆者作成)

Liste des associations membres de la Fédération Sénégalaise des Association de Personnes Handicapées (FSAPH)

Association 団体名	Note 備考
(1) [*] Association Nationale des Handicapés Moteurs du Sénégal (A.N.H.M.S) (セネガル全国肢体障害者協会)	肢体障害
(2) [*] Amitié des Aveugle du Sénégal (A.A.S) (セネガル視覚障害友の会)	視覚障害
(3) [*] SOS Handicap Réinsertion Sénégal (SOS セネガル障害者社会参加)	一般
(4) [*] Mouvement pour le Progrès Social des Aveugles du Sénégal (M.P.S.A.S) (セネガル視覚障害者社会発展運動)	視覚障害
(5) Association Nationale pour le Développement des Lépreux Blanchis (ANDLBS) (ハンセン病回復者発展全国協会)	ハンセン病
(6) [*] Association Nationale des Sourds du Sénégal (A.NA.SSEN) (セネガル全国ろう者協会)	聴覚障害
(7) [*] Association Nationale des Albinos du Sénégal (A.N.A.S) (セネガル全国アルビノ協会)	アルビノ
(8) Association Nationale des Aveugles Musiciens du Sénégal (A.N.A.M.S) (セネガル全国視覚障害音楽家協会)	視覚障害、音楽家

(9) Regroupement National de Solidarité des Sourds (R.N.S.S) (全国ろう者連帯グループ)	聴覚障害
(10) Association Sénégalaise de Solidarité d'Entraide pour la Réinsertion des Personnes Handicapées (ASSERH) (セネガル障害者共済社会参加連帯協会)	一般、共済
(11) Association Handicap-Form. Educ (障害者職業訓練教育協会)	一般、職業訓練
(12) Association pour la Promotion Economique et Sociale des Handicapés Visuels (視覚障害経済社会促進協会)	視覚障害、経済社会
(13) Association Nationale des Accidentés du Travail et leurs Ayants Droit (ANATAD) (全国労災者非扶養者協会)	一般、労災
(14) Appui aux Handicapés Visuels (A.H.VI) (視覚障害支援者)	視覚障害、支援者
(15) Association de Promotion des Handicapés (A.PH) (障害者促進協会)	一般
(16) Handisport (ハンディスポーツ)	一般、スポーツ
(17) Bok Joom et Aide aux Lépreux Blanchis du Sénégal (ボック・ジョームとセネガルハンセン病回復者支援)	ハンセン病
(18) Association des Artistes Handicapés (障害者芸術家協会)	一般、芸術家
(19) Association de Protection et d'Assistance aux Personnes Démunies et Handicapées (貧困障害者保護支援協会)	一般、救貧
(20) Association Sénégalaise de Victimes de Mines (ASVM) (セネガル鉱山労災者協会)	一般、鉱山労災
(21) Association Nationale pour la Réinsertion des Lépreux Blanchis du Sénégal (ANRLBS) (セネガル全国ハンセン病回復者社会参加協会)	ハンセン病
(22) Association pour la Renaissance des Aveugles du Sénégal (セネガル視覚障害者復興協会)	視覚障害
(23) [*] Union Nationale des Aveugles du Sénégal	視覚障害

(セネガル全国視覚障害者組合)	
(24) Alliance Générale des Handicapés pour la Promotion et de Développement du Sénégal (セネガル障害者保護促進一般同盟)	一般
(25) Association Nationale des Anciens Militaires Invalides du Sénégal (ANAMIS) (セネガル全国退役傷痍軍人協会)	一般、退役傷痍軍人
(26) Association pour la Promotion des Aveugles du Sénégal (セネガル視覚障害者発展協会)	視覚障害
(27) Association Nationale des Handicapés pour le Développement (ANHD) (全国障害者発展協会)	一般

[*]: membres fondateurs (連盟創設メンバー)

団体名から障害種別が分からないものは「一般」とした。また、特定の目的や障害の来歴に特色をもつ団体については併記した。

多くの種別の身体障害を網羅している。ただし、精神障害、知的障害の分野、そして HIV 感染者の団体は含まれていない。一方で、ハンセン病回復者、アルビノの団体があり、運動の中心に参画している。

連盟の創設時点から参加している7団体の種別の構成は、視覚障害3、肢体障害1、聴覚障害1、アルビノ1、一般1であった。アルビノの団体が当初から参加している点が特色である。また、視覚障害の団体が中心的な役割を占めている様子が分かる。

現在の会長を含む役員たちと面談したが、いずれも視覚障害または肢体障害をもつ人たちであった。このような団体が、全国的な運動を牽引してきたと見られる。

連盟には全国団体が加盟しているが、この他に、ダカール近郊のピキン (Pikine) やチャロイ (Thiaroye) ではその都市で活動する障害者団体が種別に設立され、さらに地域ごとの障害種別を越えた連盟が成立しているケースがある。このような諸団体は、NGO や海外からの援助などとともに、地域での教育や就労支援の活動を進めている。

中には、NGO の協力を得て、試行的に、地域の普通学校に障害をもつ児童を通わせるための支援事業をしている障害者団体の例もあった (ピキン、チャロイ、ルフィスクなど)。このような地域での草の根の活動と、その中で実現している障害児教育の全容については、まだ調査されていない。

第4節 ろう者コミュニティの文化と言語

1. ろう者の団体

セネガルには、現在、ろう者の団体が二つ存在している。いずれも、ダカールを中心として活動していると見られる（表7）。

表7 セネガルにおけるろう者の団体（インタビューに基づき筆者作成）

<p>(1) Association Nationale des Sourds du Sénégal (ANASSEN) (セネガル全国ろう者協会) 1990年、セネガル人男性ろう者 Moustapha Tambadou によって設立 会長: Ousmane Diao 世界ろう連盟の加盟団体 事務所はなく、ダカール市内の会長の自宅が本部機能をもつ。</p>
<p>(2) Regroupement National de Solidarité des Sourds (RNSS) (全国ろう者連帯グループ) 1997年、セネガル人男性ろう者 Moustapha Diop と、コートジボワール人男性ろう者 Sohou によって設立 会長: Moustapha Diop 事務局長: Eugène Diatta 事務所がダカール市内の Bistcuiterie, Grand Dakar 地区にある。</p>

これら2団体は対立関係にあるのではなく、前者は一般的なろう者の協会、後者はろう者の就労や通院などの場面における具体的な生活支援に重点を置いているという性格の違いがある。ろう者個人の交友関係も、両方の団体にまたがっている。両団体とも、セネガル障害者団体連盟 (FSAPH) に加盟している。

なお、RNSS の発足に当たって、コートジボワール人のろう者が関与していたという点が興味深い。なお、コートジボワールにも、ベナン人が結成と運営に深く関わったろう者の NGO がある。国境を越えた人びとの移動が頻繁であるフランス語圏西アフリカでは、障害をもつ人たちの流動性も高く、障害者運動が多国籍のメンバーによって担われることがある。

2. ろう者の宗教

ろう者の多数はイスラーム教を信仰している。キリスト教徒も少数ながら存在している。もとよりイスラーム教徒の住民が多数を占めるセネガル社会の状況を反映しているものと見られる。

なお、同国に初めてろう学校を設置したのは、アフリカ系アメリカ人のろう者宣教師アンドリュー・フォスターである。彼はプロテスタントの布教をかねて、西アフリカで広域的にろう教育事業を展開した。ダカールにも、1977年にろう学校を設置している（前述）。少数ながら存在しているセネガルのろう者のクリスチャンの存在は、その学校教育と平行して行われた布教の影響である可

能性がある。

なお、同国内に、ろう者たちが集まるモスクやキリスト教会があるという情報は、現在までのところ得られていない。ろう者たちの語りによれば、そのような場所はないと言う。

3. セネガルの手話言語: 一般的な特徴

セネガルのろう者が用いる手話言語を観察した。多くの語彙はアメリカ手話の語彙に由来している一方で、フランス語の文法と語彙に適応した要素（たとえばフランス語の語の頭文字を指文字で織り込むなど）をあわせもつ、一種の混成言語が話されていた。これは、コートジボワールやベナン、カメルーンなどのフランス語圏アフリカに属する諸国で共有されている手話言語と、多くの点で共通していた(亀井 2006)。筆者がダカール市内でろう者と初めて会った時も、カメルーンやコートジボワールで習得した手話がそのままほぼ通用した。

セネガルで用いられているのは、「フランス語圏アフリカ手話 (Langue des Signes d'Afrique Francophone (LSAF))」のヴァリエーションのひとつと見られる。この言語は、先述のアメリカ人ろう者宣教師フォスターらによって創始されたアフリカでの広域的なろう教育、その過程でのアメリカ手話の導入、フランス語の識字教育の影響のもとで成立したものであるが、セネガルでも同様の現象があったものと推定される。

近隣諸国(コートジボワール、ベナン、カメルーン)の手話語彙と比較したとき、セネガルで用いられている特有の語がいくつか見られた。たとえば、/invitation/ (招待)、/mosquée/ (モスク)、/général/ (一般の) などである。これらは、いつどのように生じたかは不明であるが、セネガル以外では見られない語であることから、この地域で作られて普及したものと考えられる。とくに、/mosquée/ (モスク) は、/église/ (教会) の手形E/Mに置き換えた語であるが、イスラーム教徒が多いというこの国の状況を背景として、キリスト教徒によってもたらされたアメリカ手話の語「教会」に改変が加えられた一種の造語としてこの地域で生じたものではないかと考えられる。

また、構成している語はいずれもアメリカ手話をルーツとしているという意味で近隣諸国と共通しているが、組み合わせ方として特有のものがあつた。たとえば、/bonjour/ (おはよう) は、近隣諸国では、/bon/jour/ (よい) (日) と表現されることが多いが、セネガルでは、/bon/matin/ (よい) (朝) と表現されていた。前者がフランス語の表現を取り入れた定型の表現であるのに対し、後者は/good/morning/ (よい) (朝) という、アメリカ手話および英語圏の表現を取り入れた定型の表現である。

また、わずかながら、アメリカ手話ではなく、フランス手話から借用されたと思われる語彙が見られた。たとえば、/oui/ (はい)、/dire/ (言う)、/comprendre/ (理解する) などである。セネガルの一部の学校または個人によって、フランス手話の導入が行われた可能性が指摘できるが、詳細は現在までのところ明らかにされていない。

4. セネガルの手話の固有名詞

そのほか、手話言語に含まれる固有名詞の収集を行った。収集した固有名詞の例は、以下の通りである。

表8 収集したセネガルの手話における固有名詞（直接観察に基づき筆者作成）

固有名詞（地名）：国、都市 Sénégal / Dakar / Touba / Thiès / Kaolack / Fatick / Diourbel / Louga / Ziguinchor
固有名詞（人名）：セネガルの大統領 Léopold Sédar Senghor / Abdou Diouf / Abdoulaye Wade / Macky Sall
固有名詞（人名）：ろう者、手話関係者の名前（ろう学校の設立者、ろう者協会の会長ほか） Moustapha Tambadou / Pape Oumar Faye / Ousman Diao / Andrew Foster / Luis Nétou / Sékou Diatta / Domingo / Alassane Niang / Famara Manga / Ibrahima Samb
固有名詞：民族名 Wolofs / Sérères / Diolas / Toucouleurs / Peuls

特徴として、以下の各点が挙げられる。

- 1) 人名のほとんどと地名の多くは、頭文字のアルファベットを指文字（アメリカ手話から借用したアルファベット）により織り込んでいる。
- 2) 人名はアルファベット2文字で表現することが多い（たとえば、Ousman Diaoであれば、/O/D/の2文字を用いる）
- 3) 著名政治家の一部には、身体的な特徴を用いるケースがある（Léopold Sédar Senghorにおけるメガネなど）
- 4) 民族名の一部には、生業文化が織り込まれている。たとえば、牧畜民Peulsには牛を追う棒を持つジェスチャーが織り込まれるなど。
- 5) 地名の一部には、その地域の重要施設などの特徴が織り込まれている。たとえば、Diourbelはモスクが林立する様態、Thièsは鉄道のターミナルに由来する汽車の様態が示されているなど。これらのごく簡素な予備調査の結果に過ぎないが、セネガルにおけるろう者コミュニティの文化の一端をかいま見ることができる。

おわりに：「資源の共有と活用」に注目して

1. 予備調査の成果と試行的生活・労働調査

本予備調査では、セネガルに設置された「アフリカ障害者の十年」地域事務局を訪れて、その活動の一部を聞き取りによって明らかにした。また、セネガルにおける人口統計、政策、教育などの資料と情報を入手し、この国の障害にまつわる動向を調べた。複数の障害者団体を訪問し、インタビューを通じて運動などの概況をまとめた。さらに、ろう者コミュニティに手話言語によって参与観察することで、同国のろう者の文化と言語の一端を明らかにした。

これらに加えて、本報告には含めていないが、「障害をもつ人びとの生活と労働」をテーマとしたデータを試行的に収集した。ダカールおよびその近郊都市、リンゲール、トゥーバの三地域において、聴覚障害、肢体障害、視覚障害をもつ市民約20名の職場または自宅を訪問し、生活と労働に関する聞き取りをした。その職種は、小売り、洋裁、指物師、美容師、染色、靴職人、楽器職人、肉屋、農業、船頭などと幅広い。

インタビューの中心をなしたおもな質問項目は、以下の通りである。

- ・職業は何か
- ・月収はいくらか
- ・教育と職業訓練について、いつどこでどのような経験を積んだか。とくに、現職につながる知識と技術をだれに教わったか
- ・起業資金はだれが提供したか
- ・次世代育成のために、若い人たちに教育、研修の機会を提供しているか

これらは、開発途上国の障害をもつ人々による「資源利用のあり方」を浮き彫りにすることをねらいとして試行調査されたものである。これらをベースにして、本調査を計画している。

2. 「障害と開発」研究と資源人類学の接点

開発途上国の障害をもつ人々のエンパワーメントを検討する場合、その身体が活用できる「資源」に注目することは重要である。ここでは、物質的な資源のほか、社会関係や知識、情報なども含めた、広義の「資源」概念を念頭に置いている(内堀 2007)。

たとえば、耳が聞こえない子どもが知識や技術を身に付けようと思ったとき、通訳なしで音声言語の学校や集団に入れられても、情報の伝達が困難であるために学習効果は小さいであろう。一方、同じ手話を話すおとなのろう者のもとで学習したり、職業訓練を経験したりすることがあれば、それはろう児にとって知識や技術を身に付けるよいチャンスとなり、やがて経済的に自立して生計を立てることにもつながるであろう。

自営業を営む障害をもつ人々の中には、しばしば、同じ障害をもつ若い人々を職場で預かり、職業訓練の機会を提供しているケースがある。また、障害者当事者団体の役員が、メンバーの就労や起業のために補助金申請の手伝いをするなど、資源を互助的な関係の中で、資源活用に工夫している様子も見られる。

イスラームの聖地トゥーバにおいて、聞き取り調査をしていた時の逸話がある。天にそびえ立つ巨大モスクの側の路上において、物乞いをしている車いすのおとなや子どもたちがいた。この物乞いはイスラームにおけるザカート（喜捨＝収入の一部を困窮者に施すこと）の慣行と深く関わっているが、金曜日は物乞いにおける収入がはね上がると述べていた。つまり、多くのムスリムがモスクに参集して礼拝する金曜日の午後の時間帯を、一種の資源として活用して生計を立てていた。

政府の公的扶助制度が脆弱な社会において、人びとがいかに生計を立てていくかを検討する上で、資源の種類と所在、そして、その流れを明らかにすることは重要である。

障害をもつ人たちが、情報や資金、場所や人脈などの各種の資源を駆使しながら、それぞれの身に適した生業文化を創っている状況を、ひとつの民族誌として描き出すことは、よりよい開発援助を検討する上でも意義のある試みとなるであろう。

とくに、資金・物質面の資源と、知識・情報・人脈面の資源のふたつのチャンネルに注目しながら、次回の本調査に取り組みたいと考えている。

謝辞

本調査は、日本貿易振興機構アジア経済研究所「アフリカの障害者： 障害と開発の視点から」（主査： 森壯也）により行われました。現地調査では、Mme Aïda Sarr および Bureau Régional de Dakar, la Deuxième Décennie africaine pour les personnes handicapées の各位、M. Aboulaye Thiam, le Directeur de l'Ecole Nationale des Travailleurs Sociaux Spécialisés (ENTSS)、Fédération Sénégalaise des Association de Personnes Handicapées (FSAPH)、Association Nationale des Sourds du Sénégal (ANASSEN)、Regroupement National de Solidarité des Sourds (RNSS)ほか現地の障害当事者のみなさまにお世話になりました。また、在セネガル JICA 青年海外協力隊員のみなさまには、調査の便宜を図っていただくなどのご協力をいただきました。

日本語文献

内堀基光編. 2007 『資源人類学 (1) 資源と人間』 東京: 弘文堂.

亀井伸孝. 2006 『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』 東京: 明石書店.

———. 2010 「コートジボワールの障害者の生計: 公務員無試験採用制度の達成と課題を中心に」 森壯也編 『途上国障害者の貧困削減: かれらはどう生計を営んでいるのか』 東京: 岩波書店. 187-211.

独立行政法人国際協力機構 (<http://www.jica.go.jp/>, 2013年11月11日閲覧)

外国語文献

Agence Nationale de la Statistique et de la Demographie (ANSD), Ministère de l'Economie et des Finances, République du Sénégal. 2006 *Résultats du troisième recensement général de la population et de*

l'habitat 2002 : rapport national de présentation.

Constitution du Sénégal (adoptée au référendum du 07 janvier 2001)

Direction de la Prévision et de la Statistique, Ministère de l'Economie, des Finances et du Plan, République du Sénégal. 1993 *Recensement général de la population et de l'habitat de 1988 : rapport national (résultats définitifs)*.

Christian Mission for the Deaf (<http://www.cmdeaf.org/>, accessed on January 1, 2014)

Disabled People's International (<http://www.dpi.org/>, accessed on January 1, 2014)

Docusound Kenya (<http://www.docusound-kenya.org/>, accessed on January 1, 2014)